

別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

ピアサポートグループに参加する乳がんサバイバーの語りの分析
—看護師の教育課題の展望のために—

氏 名

増 永 悦 子

論 文 内 容 の 要 旨

論文概要

本研究の目的は、ピアサポートグループに参加する乳がんサバイバーの語りの分析を通して、それに関わる看護師の教育課題を検討することである。

序章で、わが国のがん統計の動向を提示し、本研究対象の成人女性の乳がん罹患数や死亡数が第1位であると論じた。そして乳がんを含め、がん体験は大きなストレスであり、多くのがんサバイバーは診断後に、鬱、不安、不確かさ、コントロールの喪失等の、心理社会的な困難を経験することを文献を用いて論じた。以上より乳がん体験は身体的・心理的・社会的課題をもつことを確認した。このような課題の中で、とくに心理社会的課題の解決方法の一つにピアサポートがあり、その意義は「治療選択の決定への影響」「異なる感情の承認の促進」「社会的孤立とスティグマの減少」等である。しかし乳がんサバイバーのピアサポートの意義は既知であるが、その名称や定義は十分整理されず混乱した状況にあるため、用語の共有を目的に乳がんサバイバーのピアサポートに関する諸概念を国内・海外文献を用いて整理し提示した。

第1章では、医療保健領域の文献を中心に、日本人成人女性の乳がんサバイバーのピアサポート研究のシステムティックレビューを実施した。その結果、4つの特徴、「1. 研究方法の違いに関する特徴」「2. ピアサポートの検討のために引用された概念・理論と、その研究的背景の特徴」「3. がんサバイバーシップの季節で分類した特徴」「4. 既存の援助特性との相違と類似の特徴」を見出した。これらの中でも「2」の知見では、これまで主に社会学・心理学の概念や理論に基づいて研究がなされていた。そのため本研究では、従来の、社会学や心理学の概念や理論に基づいたピアサポート研究の立場か

ら脱却し、「語る」こと、それ自体の重要性を尊重する立場をとり、乳がんサバイバーの語りの分析を行うことにした。

そこで第2章では、乳がんサバイバーが「語る」こと - その「物語」自体の意義を提唱した研究者の文献を用いてその意義を論じた。そして研究方法としてのナラティブアプローチを概観して整理し、本研究でのナラティブ及びナラティブアプローチの定義を提示した。さらに医療保健領域におけるナラティブ及びナラティブアプローチの機能と意味を整理し、この領域でのナラティブアプローチの意義を論じた。

第3章では、筆者が実施したインタビュー研究の知見に基づいて、乳がんサバイバーのピアサポートグループの意義と課題を論述した。本研究で対象とした乳がんサバイバーのピアサポートグループは医療施設内にあり、その施設の医療者との関わりをもつ2つのグループ（A・B患者会）である。A患者会参加者のインタビューの分析結果からは、3つのテーマ『地域基盤性』『病院基盤性』『医療者関与性』が抽出された。また、A・B患者会のリーダーのインタビューの分析結果からは、『患者会への思い』『同病者への支援』『患者会リーダーのあり方』が抽出された。同病者の仲間のがん再発や死に関わる機会を有するリーダーの課題と、リーダーを支援する看護師の教育課題の、一層の解明が必要であると考えられた。

第4章では、筆者が実施したインタビュー研究の知見に基づいて、乳がんサバイバーのピアサポートグループの参加者の課題を論述した。個々の乳がんサバイバーの課題については、がん患者家族・遺族の体験をもつ乳がんサバイバーに焦点を当て、その課題を論じた。まず、筆者のがん患者遺族研究を用いて課題を述べた。そこには『医師に関する語り』『看護師に関する語り』があり、それに密接に関連した『緩和ケアに関する語り』を加えた3つのテーマと、これらに共通に抽出された【見守られ感】【見捨てられ感】に着目した。分析結果から、終末期患者と家族へのコミュニケーションスキルの向上のための看護教育の強い必要性が見いだされた。そして、がん患者家族・遺族の体験を同時にもつ乳がんサバイバーの語りの分析結果からは【見守られ感】【見捨てられ感】の重なりに加えて、がん患者家族・遺族と乳がんサバイバーの両方を経験する者が、周囲にも患者会にもいない孤独感が見いだされた。家族を喪失する年代にも関わらず、その背景や敬意が理解されない状況が推察され、がん患者家族が、同時にがんサバイバーである可能性があることを、看護教育で取り上げることの必要性が見いだされた。

第5章では、乳がんサバイバーのピアサポートグループに関わる看護師の教育の中でも、看護基礎教育に焦点化して教育課題を論述した。4年性看護学部における看護基礎教育では学士としての一般的な能力だけでなく、看護専門職の能力つまり看護実践能力が必要とされており、その能力についてまず文献を用いて論じた。また看護実践能力の獲得過程の例として、筆者らによる研究知見を提示した。それは、看護実践能力の基礎となる論理的思考力を発展し向上させるための、教育方法の検討の必要性である。また筆者らは批判的思考の態度にも着目して文献研究を行った結果、わが国の看護学生の批

判的思考態度を捉える際の共通要素の存在や、看護学生が共通にもつ7つの構成要素を確認した。さらに、批判的思考態度への効果が確認された学習方法は「グループ学習」「ディベートを用いた学習」であることが分かった。そして、第3章と第4章で論じた研究結果から得た看護師の教育課題を整理した結果、1. 知識に関する課題、2. 技術・態度に関する課題が見出された。

終章では、本論文の研究成果を章ごとに整理して提示した。最後に、本論文の研究成果を用いた今後の看護基礎教育での展望を論じてまとめとした。

学位関係

学位関係